〔御湯殿の上の日記〕長享三年正月四日、むろまち殿より御あふぎ、ことしも御さか月御ゑうちやくありたきよし御申、　五日、むろまちどのへの御さかづきに二色五かそひてまゐる、てんそうへつかはさるゝ、

明應四年正月四日、むろまちどのより、としゞの御あふぎびぶつ三色まゐる、御つかひてんそう御ふみにて申さるゝ、

永祿五年正月一日、ぶけよりとしゞのたまぎつちやうまゐる、御つかひひろはし大納言、たまぎつちやうわかみやの御かたより、御いちやもたせて御まゐり、はくゑじうにたまぎつちやうたぶ、

〔四民往來〕家老江別紙之文章

別啓申上候、於御吉慶者、本書奉得尊意候、先以尊公樣愈御勇健御超歳可被遊と、目出珍重奉存候、隨而輕微之品御座候得共、御持扇一箱進上之仕候、誠以年序御祝詞之印迄御座候、恐惶謹言、

年始媚風の文章

肇曆之嘉兆、萬國一統幸福申納候、其御境貴下愈御全寧御超歳、千鶴萬龜不可過之存候、隨而爲年贄、五明一箱致贈進候、素顯千秋之賀而已ニ御座候、萬慶期永陽之辰候、恐惶謹言、

〔空華日工集〕永德二年正月一日、天氣殊佳也、曉鐘一鳴、定起出堂、諸堂巡香罷、知事莊甲例至方丈、而人事獻贄、余亦有報、　七日、晨誦罷、冒雪趣西山、先三會燈前炷香三拜、院主人事、次雲居炷拜、與僧錄人事、話及小田幷建長住持事、飯了、便出以一襲十力而爲人事、　十六日、○中略　伴僧錄抵通玄寺賀歳、尼長老母子三人、人事一襲十力、

〔空華日工集〕至德二年正月五日、上生看經、滿散罷、欲歸大慈院、臨將出門、忽萬壽獨芳賀歳、山門修正滿散鐘鳴、伺住持入佛殿、扣方丈室、略通賀歳之禮、徑歸大慈、諸堂炷拜、　六日、檀那佐々木殿來、禮獻